

## 冷たい小鳥と零度のシナリオ

可愛い二羽の小鳥を鳥籠で飼い始めた。

雄と雌だから巣穴に卵を産んでくれるかも知れない。

慣れてきたら手乗りになってくれるかも知れない。

だが、すぐに誰も世話をしなくなっていった。

糞と羽だらけの鳥籠は異臭を放ち、水は濁りきっていった。

たまに餌箱を交換する程度で、小鳥達は辛うじて命をつないでいた。

期待に満ちて歓迎された二羽の小鳥は、あっという間に無視され始めた。

やがて小鳥達は異常な行動をとり始めた。

自らの羽を口ばしで掻き毟り、一羽がもう片方を攻撃し始めた。

止まり木の上で動かず一点を見つめ続けたり、鳥籠の下に降りて同じところをぐるぐる回ったり、籠をよじ登り奇声を上げた。

一羽は衰弱して痩せてゆき、もう一羽は餌を独り占めし、肥満していった。

ある日、一人が飼い主を代表して小鳥の購入元であるペットショップに出向いた。

多少見栄えを良くした鳥籠に、肥満した一羽と衰弱した一羽を入れて連れて行った。

籠をきれいにしても、中の小鳥達がおかしいのは一目瞭然だった。

ペットショップのオーナーが怪訝な顔をすると、持ち込んだ者がこう言った。

「この小鳥、うちではもう飼えません。お金、返さなくていいから引き取ってくれませんか？」

残酷な仕打ちを文章にしてみると、あっさり終わってしまった。

小鳥の様子からも解るが、劣悪な環境と無視と無関心に晒されて、小鳥達は完全に正気を失っていた。

数ヶ月間、あの鳥籠の中でどれだけ悲惨な思いをしてきたんだろう。

実験的な目で見れば、生き物を発狂させるのに、特別な手練手管や知識など必要ないということだ。

誰にでも、どこでも、いつでも簡単にできる「内側からの破壊行為」だ。

結果的には死を招きやすくなり、時間はかかるが、緩慢な殺戮行為と言ってもいいかも知れない。

ペットショップに小鳥を返還しに行ったのは、当時7~8歳くらいの私だ。

小鳥が餓死しない様に、時折、掃除や餌やりをしていたのも私だ。

自発的にはない。

「自分が飼いたいと言いつつ出したんだから責任を持て！」「臭い！」「汚い！」「何とかしろ！」と、両親から暴言が飛び出た時にだけ渋々動いた。

正直に言うと、それすら面倒だった。

私も他の家族同様に小鳥達を無視したかったが、仲間に入れてもらえなかっただけだ。

小鳥を飼うことを勧めてきた両親も、共に一羽ずつ責任をもって飼うと言っていた妹も、全て丸投げした。

いつの間にか小鳥の問題は私一人の責任で「あんたが悪い！何とかしろ！」の大合唱になっていった。

彼らはいつもこうやって絆を固めてゆく。

だらしのない、残酷な頭の悪い無責任な姉—長女である私に、振り回される家族だけが被害者として際立ってゆく。

“ペットショップに引き取られたあの小鳥達・・・  
商品として、また売ったんだろうか？  
空に放して、自由に飛び回らせたんだろうか？  
どっちでもいいや。  
この世話から抜け出せるのなら。”  
子ども心に思い浮かんだことだ。

私以外の家族は、3人一塊で丸投げし、私はたった一人、孤立しながらペットショップに丸投げした。

今も、私の中では、小鳥達への後悔や悲しみや罪悪感はなく、腑に落ちない怒りだけが渦巻いている。小さかろうが大きかろうが、他者の命よりも、いつも自分だけが何かを負わされることへの視点しかないからだ。

“何でいつも私だけなの？”

この疑問の前に、自分以外の命など二の次、三の次だ。  
何が悪い？  
私はちっとも悪いなどと感じない。  
教えてやろうなどとしても、無駄である。  
感じることは、人から教わるものではないからだ。

3～4歳以前の記憶を、明確に持っている人は少ないと思う。  
私もほとんど持っていない。  
ただ、いつも違和感を覚えてきたのは、記憶がその頃から突然始まるからだ。

ぼんやりした記憶の続きで、少しずつ思い出せるものが増えていくのではない。  
何も無い所から、急に記憶が始まる。  
今までは、それが気持ち悪くて仕方が無かった。

だが最近、偶然にも記憶が連なる状態になった。  
ある日、私に古い骨折箇所があると指摘されたのがキッカケだった。

私には骨折の記憶はない。  
生まれてから一度も骨折などしたことがないからだ。

だが、「独特の歪な骨の付き方は、骨折しても適切な治療を施さなかった状態によく見られる形だ。」と言われた。  
「骨折の記憶がないなら、生まれつきかも知れない。」と言われたが、多分、0～4歳の間で骨折したのだろう。

私の身体をくまなく調べたら、こうした骨折跡や怪我の痕跡がいくつか出るかもしれない。  
首や背骨の不自然な曲がり具合は、整形外科や接骨院で指摘を受けることが多い。  
肺の中に映る原因不明の小さな白い影も、内科医は首を傾げることが多い。  
異常や障害レベルではないが、医療関係者の関心を引くらしく、そこに至った経緯を尋ねられることがよくある。

要は不自然なのだ。  
事故、病気、何らかの人為的なものが加わったのではないか？ということらしい。  
私には思い当たることがない(思い出せなかった)ので、「解りません」といつも答えていた。

だが、一つだけ解っていたのは、子ども時代、命に関わりがなければ医者には連れて行かれず、放置されてきたということだけだ。  
両親にとって、自分達が社会的に責められるような状態でなければ、私を医療関係者に見せる理由などなかったからだ。  
しかし、そんなことは、身体の不調で訪れた関係者に言うことではないし、言うつもりもなかった。

妹が生まれる前、母親が、近隣に聞こえないような口パク状態で、ありったけの罵詈雑言を吐き散らしながら、私の両肩を長時間激しく揺さぶり続けたので、畳の上に嘔吐したことがある。(母親は実際には声を出していたのかも知れない。私の耳には音声が一切入ってこなかった。激しく揺さぶられ続けていたので、ひどい車酔いの様な状態になっていた。)

母親には嘔吐そのものが気に入らなかったのだろう。  
嘔吐物の中で、声にならない口パクの憎悪を浴びながら放置されて惨めな思いをさせられた。  
3~4歳といえ、私に怒りを掻き立てる時間があつたから、母親はすぐに解放してくれなかったはずだ。

母親の気が済んで、嘔吐物の始末が終わる頃、裏向かいに住む母親の友人である若い母親が家を訪ねて来た。  
「けいちゃんが戻しちゃった。だから吐いた物の匂いがひどくてごめんね」  
母親の言葉に、裏向かいの若い母親が、心配そうに私を見ていた。  
私は一点を見つめたまま、決してその女性の顔を見ようとはしなかった。

“嘘つき。  
風邪じゃない！  
食べすぎじゃない！  
心配なんかしていない！  
私を医者になんか連れて行かない！  
その女が母親面してアンタに話していることは全部嘘だ！  
こんな茶番を見抜きもせず、神経質で病弱な子どもの世話は大変だと同情するオマエなんか大嫌だ！  
オマエも同類だ！  
母親面しているその女と同類だ！  
見せかけの優しさに酔ってるだけじゃないか！”

その頃の私の内面を代弁したら、きっとこんなことを言っていたらろう。

母親の話は続く。

「この子は人見知りだから。心配してくれる人にもこういう態度しかとれないの・・・」

得意なお涙頂戴話を繰り返していた。

話し手にも、聞き手にも、強い怒りと侮蔑を感じたことを覚えている。

自分が無断借用されて、勝手に進行していく臭い芝居を見ているような感覚だ。

人前に出る時、誰かが訪ねて来た時、家族アルバムの写真撮影の時・・・

こうしたイベントがなければ、私の存在など無視されていた。

だが、室内とはいえ、外に出ていられただけマシだ。

母親が私の存在そのものを忘れていたい時は、押入れか台所の床下収納(調味料、漬物類などを貯蔵する穴倉)が、私の居場所だ。

押入れは床下よりまだマシだが、暗くてジメついていて、体の動きが制限され続けることは辛く怖い。

必要がある時だけ、身綺麗にされて”手をかけられている子ども”として、添え物の様に借り出される。

あるいは、私に不満をぶつけたい時だけ両親の関心が向く。

救いだったのは、台所の床下に入れておくには、私の成長が早かったことだ。

ある程度、蓋を閉められなければ、嫌でも私の存在が見え隠れするからだ。

日中、幼い私と二人きりで過ごす母親にとっては、こうすることで現実から逃れていたのだろう。

自分が思い描いた想像図に、私の様な子どもの存在は耐えられなかったからだ。

推測だが、骨折跡、背骨や首の少し不自然な曲がりや歪さは、この時にできたのかも知れない。

台所の床下収納場所は、子どもとはいえ、背中や首を折り曲げなければ入りきらない。

短時間でも、”子どもを収納できる期間”内で頻繁に押し込んでいれば、子どもの柔らかい骨が不自然に変形してしまうことくらい素人の頭でも何となく解る。

3~4歳までのことは、エピソード的には数える程しか覚えていないが、身体や感覚は、完全に忘れ去ることができずに覚えているらしい。

当時を思い出させるものは、今も恐怖心や不快感や不安で一杯になる。

母親が私の妹を身ごもり、その妊娠をきっかけに、父親の不穏さが“性虐待”という形で私に向かってきた。

その前からあったのかも知れないが、明確な記憶はこの辺りからだ。風呂場で私の長い髪を引き掴んで、自分の局部を私の口に押し込んだのだ。

「恨むんならお前の母親を恨め！全部あいつが悪いんだ！」

父親のこんな暴言を、薄ボンヤリ覚えている。

こうした形で、自分の不安や鬱積を、幼い子どもに発散する術に味を占めた父親の行為は、不定期に日常化した。

窒息と性的興奮が結びついている人だから、性虐待、虐待行為の最中に私を呼吸苦に陥らせたことが、原因不明の不自然な気管支や肺の炎症を、何度も引き起こしたのかも知れない。

肺に映る原因不明な白っぽい薄い影は、そんなことの名残なのかも知れない。

どれも、決定的な証拠には欠ける。

関連妄想と言われればそれまでだし、両親はそれも見越していた。

“完全な証拠が残らない限り、いくらでも言いくるめられる”

確信があつての行為なのだ。

10代になった私に、家庭内の性虐待を教師達に暴露された母親が、私に詰め寄った言葉がよく表現している。

「これ(性虐待)が本当だって言うんなら、証拠を見せなさいよ！証拠を！そうしたら信じてあげるから！」

やがて、母親は妹の出産の為に入院していった。

逆算すれば、私はその頃4歳だ。

出産を控えて入院している母親を、父親と見舞う度に、屈辱と惨めさがのしかかる。

私が父親からひどい目に遭うのは、母親のせいであり、腹の中の子どものせいなのだ。

だけど、母親は出産を控えて幸せそうに話し、父親も子煩悩な顔をしている。

～二人目の子どもを授かり出産を前に幸福そうにしている若い夫婦～

まるでテレビドラマのワンシーンの様だ。

茶番。

大根役者。

三文芝居。

私だけが混乱を抱えたままだ。

「新しい命を受け入れられず、嫉妬混じりに混乱している難しい子ども」。

こんなくだらない台詞のやり取りが聞こえてきそうだ。

実際に、このくだらないシナリオの中の私の立ち位置はそんなものだ。

医者も看護婦も、母親も父親も、腹の中の妹も、何もかも大嫌いだった。

与えられ続け、固定される自分の役どころも気に入らなかった。

やがて、生まれた妹は退院した母親と共に帰宅し、天井に吊るしたベビーベッドの中ですやすやす眠っていた。

私は、赤ん坊をあやす振りをしてベッドを揺らした。

ベッドは振り子の様に大きく揺れた。

もっと力を入れた。

目一杯漕いだブランコのように、大きく揺れだした。

生まれたばかりの赤ん坊である妹は、狂ったように泣き叫び始めた。  
私はますます大きく揺り動かした。  
全身を使って。  
4歳の女の子でも、反動をつければ大きく揺らすことができる。

“コイツ、ベッドから飛び出て、床か壁に叩きつけられればいいんだ。”  
私は本気だった。

赤ん坊の異様な泣き声を聞きつけて、母親が駆けつけてきた。  
妹を慌てて抱きしめて、私から離れた。  
「何やってんのよ!？」  
最初に記憶している母親の怯えた顔だ。

異常で残酷で冷酷で、協調性がなく怠惰で嘘つきで、感謝や敬意が払えない。  
どんなに世話をしても、不満や怒りや憎悪しか返さない。  
自己中心的で抑制が利かず、楽な道ばかり取り続ける。  
将来が火を見るより明らかな子ども。

近隣の人も学校も、両親のことを全面的に信じた。  
時々行き過ぎた両親の暴言や暴力も、“困った子どもの私”を見れば親に同情したくなる。

“自分に何が起こったのか？どういう構造が背景にあるのか？”を、何一つ明確化できない私は、“両親や親類の「正しさ」”を、社会や他の人々に証明し続ける様な存在から、抜け出せない日々が続いた。

一通り書き終わったので、よく晴れた空を見上げてみた。  
小鳥のことをまた思い出してみる。小学生の頃、早朝の道路に落ちていた凍死したインコの死骸を、ポケットに詰め込んで家に持ち帰ったことを思い出した。

歯磨きをしていた父親の所に持って行き、  
「まだ息があったから連れてきた。でも今は動かないね」  
と言って見せた。

“瀕死のインコをポケットに入れて持ち帰ったが、息絶えてしまった”  
という私のシナリオで喋った。  
さも自分の手の中で息絶えたかの様に話した。

両親は、薄気味悪そうに顔を見合わせていた。  
特に母親は完全に私を警戒していた。  
父親の目にかすかな戸惑いがあるのを見逃さなかった。

”小さな動物の命にも目を向ける やさしい心温かい子”  
という演出と役どころに自己満足しながら、私は両親を真正面から見る。

登校した私は、級友たちに早朝の美談を話して聞かせた。  
「凍死した可哀想な小鳥・・・」と、哀しそうな顔をする女の子達を見ながら、私は内心嘲笑していた。  
彼女達の同情は、母親の嘘をそのまま信じ込んで同情していた、あの裏向かいの若い母親の姿とダブっていった。

女—つまり同性というのは、本当に始末が悪い。  
余程手の込んだものでなければ、嘘も芝居も簡単に見抜くからだ。

対する男—異性は、その点、付け込み易い。  
特に、集団で孤立傾向のある異性は。母親と妹に取り入ることが無理ならば、少しでも与しやすい父親が  
いいに決まっていた。

彼らを結託させてはいけない。  
疑心暗鬼に陥らせ、仲間割れさせておかなければ。  
家庭という密室で、一丸となられたら、私があ的小鳥達と同じ末路を辿ることになるのだから。

自分の内側から侵食されてゆくような父親の行為を、遮断したり糾弾したりせず、許容しながら彼に寄り  
添っていけば、この集団の結束を妨げられる。

父親は、私の盾であり、壁であり、防波堤であり、生き残る為の駒—私の”物”なのだ。

母親と妹を嫉妬させる武器でもある。  
武器でも盾でも、“物”は、ただ黙って見ている動かない。  
だから、代償という力を使う。

私は、誰にも経緯を悟られず狂って死に至るよりも、生きる道を選択した。  
思い出して繋げてみたら、こんな話になっただけだ。  
その日は、自分の子ども時代を哀れんで沈み込み、少し悲しくなったが、身体が妙に強張るだけで、あと  
は何も感じなかった。

もし、感情を持たない人間を育て上げたいのなら、徹底的に命を無視して、表面的な保護だけを与え続け  
ればいい。  
誰にも非難されずに、“冷たい子ども”に仕上がる確率が高いだろう。

その子どもが生きながらえて大人になったら、見で、感情のあるフリをする人間になるかも知れない。  
自分の命も、他の命も、粗末な考え方しか持てない、大切にされる何かが欠落した人間に。

だけど、選択肢は残されている。  
生きている限り。

自分の命を絶つか、他の命を絶ち続け行き着く所に行くか、全く異なる道をとるのか。

私は、最後の道を選択している。

自分を精一杯生き続け、他の命を奪わずに、暴力や性暴力や、策略ではない関わりを選択する。

私の作るシナリオに、そんなものは要らないからだ。

冷たい小鳥と同じように生きた温度を感じられなくても、人としての成長も感謝や敬意などの”選択”は可能なのだ。

訓練すれば、愛情だって選択ができるようになるだろう。

私の脚本と役どころは、そういう選択の上に成り立っている部分が多い。

自分で働ける様になり、一人で家を出た頃。

数年後、妹に会った時のことだ。

「お姉ちゃんが家を出てから、(両親は)二人ともすっごく仲が良いんだよね。」

と、勝ち誇って幸福そうに語られた。揉め事も喧嘩もなく、穏やかで平和で落ち着いた家庭になったと言っていた。

「うちは、お姉ちゃんが居ない方が上手くいくみたい」

「(父親の)性虐待？私にあるわけじゃないじゃん。」

そうだった。

妹は、父親からべた付いた一線を越えるような行為に、真っ向から「何それ？」と言える立場だった。

常に母親が矢面に立ち、妹と父親が二人きりにならない様に細心の注意を払ってきたのだから。

母親にとっては、保護の差別化も、私への腹いせの一つなのだ。

妹の言い分は、そうした背景がある。

「(父親に)そういう態度や行為をとらせてきたのは、お姉ちゃんがそうさせてきただけじゃん！」

幸せそうに笑っている妹の目は、私への侮蔑の色をますます濃くしていった。

私の帰る場所は、1ミリたりとも存在しないのだと悟った。

「海外に生活の場を見出すので、やがて老いて行く両親の面倒は国内に居る私に任せたい。」

妹の言葉で理解した。

“そうか、だから目の色とは別に笑顔で私に連絡してくるのか。”

複雑な感情の動きを読み取るのは苦手だ。

いくつか“機会”があった、あの頃とあの時。



“この女、妹の息の根も完全に止めておけばよかったかなあ。  
虫や動物達のように。”

あの選択は押しが甘かったのかも知れない—と思いながら、私はおどおどした笑顔で、再会を空約束しながら妹を見送った。

少々時間はかかっても、完全に関わりを断ち切ることを決意し、その選択に向けて気持ちと思考が動き始めた。

自分の内側に、重たく砂が入り込んでいくような感覚になっても、選択は行えるのだ。

とても天気が良く、空が青くて風の心地いい、穏やかな午後のことだった。

(けい)